

研究発表もうしこみフォーム

氏名：湊邦生・遠藤隆俊・大櫛敦弘・田所千峰子・芝知子・荻礼子

氏名のローマ字表記：Minato, Kunio; Endo, Takatoshi, Okushi, Atsuhiko; Tadokoro, Chihoko; Shiba, Tomoko; Ogi, Reiko

所属：高知大学

専門分野：社会学（湊）、東洋史（遠藤）、中国史（大櫛）、図書館情報学（田所、芝、荻）

発表のタイトル：高知大学学術情報基盤図書館青木文庫における青木富太郎の蒙疆調査資料について

発表要旨（600字～800字程度）：

本発表では、高知大学学術情報基盤図書館青木文庫の所蔵資料のうち、故青木富太郎名誉教授が戦中期に行った蒙疆調査に関する資料について紹介する。

モンゴル史・東洋史で多数の業績を挙げた青木氏は、戦中期の蒙疆、主にダルハン旗右翼に3回赴き、現地調査を行っていた。氏はこの調査を通じてモンゴルの共同体原理としての家族制度に着目したとされており（高知大学三十年史編集委員会(1982)『高知大学三十年史』高知大学三十年史刊行委員会；「青木富太郎先生を偲ぶ」(1989)『海南史学』27:63-64）、そのような関心は、後の博士論文『蒙古家族制度史』に代表される研究に結実している。

しかし、氏の著作目録を確認する限り、調査結果が公刊された形跡はほとんどない（「青木富太郎先生略年譜及び主要著作目録」(1973)『海南史学』10:64-66；ユネスコ東アジア文化研究センター(1988)『日本における中央アジア関係研究文献目録：1879年-1987年3月』ユネスコ東アジア文化研究センター）。そのため、調査の内容や成果については未知の部分が大きく残っている。

発表者は青木氏の没後に遺贈された蔵書・資料の特殊コレクション「青木文庫」の未整理資料の確認とリスト作成、さらにオープン・アクセス化を見据えたデジタル・アーカイブ化に取り組んでいる。その過程で、氏の蒙疆調査に関する記録やメモ・写真等、数多くの資料の存在が判明した。今後これらの資料を精査することで、戦中期モンゴルの実像とともに、日本におけるモンゴル研究の歴史について、さらなる解明が期待される。

本発表ではそれら調査資料の概要について報告するとともに、写真等一部資料について紹介する。本発表が日本のモンゴル研究のうち、半ば埋もれていた「遺産」に再び光を照らす一助となれば幸いである。